

## 修学旅行での混浴、女子の羞恥心が爆発する

高校3年A組の修学旅行は、秋の風情漂う温泉地で行われることになっていた。小林美咲、吉田健太、坂本達也、高木健一、中村真、山本さくら、川上あかり、高橋結衣、松本美香、佐々木愛を含む生徒たちは期待を胸に、バスに乗り込み、長い旅路を共にした。目的地に到着すると、そこは歴史ある温泉旅館だった。古風な外観に、生徒たちは一目でその趣を感じ取った。

しかし、宿泊の詳細を確認した担任の田中先生が驚愕の声を上げる。「何！？ 混浴しかないのか？」クラス内でざわめきが広がった。抗議する声、戸惑いの表情、そして内心で歓喜する男子たちの姿が交錯する。

「先生、これってどういうことなんですか？」クラス委員長の小林美咲が腕を組み、厳しい口調で問う。彼女は内心で焦りながらも怒りの表情を浮かべ、毅然とした態度で言う。美咲の瞳には、クラスをまとめ上げる責任感と、本当に混浴に入るのかという不安が入り交じっている。

「学校側のミスだ。今日はこれでどうにかなるわけじゃない。もう一度確認してみるが、今日はこのままで行くしかない」と、田中先生は困惑しながら応じる。先生の声は、事態の収拾に自信がないことを隠せない。

その瞬間、クラスは混乱に包まれた。抗議の声が四方から上がる。「信じられない！」「これ、どういうこと？」と叫ぶ声、涙を浮かべる女子、そして内心で歓喜する男子たち。特に、お調子者の高木健一は、「マジかよ」と笑みを浮かべていた。内気な吉田健太は、混乱の中でも女子の

裸を見る期待で心が躍る。冷静を装う中村真は、女子の制服の下にある裸体を思い浮かべ笑っていた。優等生の坂本達也は、クラスを落ち着かせるべく、静かに「みんなくつろげばいいんだ」と言うが、内心では興奮が抑えられない。

女子たちは恐怖と羞恥心に苛まれていた。美咲は、「どう対処すればいいのか...」と考えながらも、泣きそうな顔をしている女子たちをまとめようとする。さくらは、「どうしよう...」と小声で呟き、恐怖に震えながらも、クラスメートへの気遣いを忘れない。あかりは、「こんなの、絶対反対だ」と強い口調で抗議し、自分の裸体が男子に見られる絶望を感じていた。結衣は、「何でこんなことが...」と嘆き、抗議を続ける。美香は、泣きそうになりながら、「こんなの、無理...」と呟く。愛は、「これ、どうしたら...」と困惑しながらも、友達の反応を見て、自分もどうすべきか決めかねていた。

先生の説得によりクラス全員が脱衣所に入っていく。脱衣所は、男と女にしっかりと分かれていた。男子たちは早々に制服を脱ぎ捨て、脱衣所から入浴場へと向かった。

「本当に女子も全裸になって入ってくるのかな・・・」男子たちの中で興奮と緊張が高まる。裸のまま湯船に浸かり、興奮と緊張が入り交じる中、男子たちは女子が来るのを待った。

高木健一は、笑顔で自分の鍛えられた身体を誇示しようとしているようだった。野球部員で運動部の象徴のような彼は、これから見られる女子の裸体を妄想し、自分の勃起が始まるのを感じ「待ちきれないな」と思っていた。健一の興奮は止めようがなく、おちんちんは硬く立ち上がり、ピクピクと動き始める。健太や達也、真も同様に自分の興奮を抑えきれず、同じくおちんちんが硬直し、微かに揺れる。

そしてついにその時がやってきた。待つこと10分、女子たちはバスタオルを巻き、羞恥心と恐怖心を抱えつつ浴室に入った。美咲は、豊満なおっぱいをタオルで隠しながらも、クラス委員長としての責任感からか、先頭で浴室に入ってくる。彼女の裸体を見られることへの羞恥心と、自分の裸体を見る男子がどういう反応を引き出すのかという恐怖が混ざり合っている。美咲はバスタオルをぎゅっと胸に巻きつける。彼女の大きなおっぱいは、その布地の下で少しでも形を主張している。「どうしてこんなことに…」と心の中で呟きながらも、彼女は勇気を振り絞り、湯船の縁に足を乗せる。バスタオルが微かにずれ、おっぱいの谷間がわずかに見える。その瞬間、男子たちから「うわ…」という声が漏れる。美咲は「見ないでよ！」と強い口調で言い、怒りと戸惑いを感じていた。彼女のおっぱいは豊満で、形が良く、抑

えれば抑えるほどタオルの上から形が浮き出る。男子たちの反応を見て、美咲は内心で「やだ、見られてる…」と羞恥心に苛まれる。

山本さくらは、小さく可愛らしいおっぱいをバスタオルで覆い、恐怖と期待が交錯する表情を浮かべながら浴室に入る。彼女の白くすべすべの肌は、湯気の中で微かに光っている。さくらは、「見ないで…」と小声で呟き、バスタオルをしっかりと抱え込む。彼女の小さなおっぱいは、バスタオルが微かにずれるたびに、緩やかな膨らみを